

7月のHUGだより

情報提供者：やましろ小児科 医師 山城 武夫

7月のテーマ：子宮頸がんワクチン

子宮頸がんの発症は日本で年間 10,000 人以上あり、約 2,800 人が死亡しています。特に 20～30 歳代の若い女性において罹患数、死亡数ともに増加傾向にあります。子宮頸がんの約 50～70%は、ヒトパピローマウイルス（HPV）の 16 型、18 型の感染が原因とされています。そこで、国はワクチンで HPV 感染を防ぐとともに、子宮頸がん検診によって前がん病変を早期に発見し、子宮頸がんの発症や死亡の減少政策を打ち出してきました。しかし、ワクチンによる副反応が問題となり、国は積極的なワクチンの接種を一時停止してきました。

HPV 感染は性的接触で感染を繰り返すため、パートナー間でワクチンを接種することで感染の広がりを抑えることができます。欧米諸国では男性もワクチン接種が推奨されています。HPV ワクチンを男性も接種することで子宮頸がんから女性を守ることができます。またパートナー同士の感染もあり得ることで、お互いの接種は HPV にて起こり得るがん発症の予防に繋がります。（HPV 感染は子宮頸がん、中咽頭がん、肛門がん、膣がん、外陰がん、陰茎がんなどがあります。）



HPV ワクチンについて

HPV 感染は 100 種類前後のウイルスが関与し、なかでも 16 型・18 型は子宮頸がん・肛門がんの原因に、2 価ワクチン（サーバリックス）として使用できます。6 型・11 型は尖圭コンジローマの原因に、4 価ワクチン（16・18・6・11 型 ガーダシル）として許可されています。最近では 9 価ワクチン（シルガード）（90%の子宮頸がんに関わる、16・18・31・33・45・52・58 型、尖圭コンジローマに関わる、6・11 型）として許可されています。

定期接種としては 2 価と 4 価が 9 価は任意接種として使われています。サーバリックス、ガーダシルはともに約 70%の子宮頸がんを予防でき、効果は 20 年ぐらい続くとされています。シルガードは約 90%の子宮頸がんを予防できるとされています。



HPV ワクチンの安全性（多様な症状）

子宮頸がんワクチンの接種後「広範囲な疼痛または運動障害」は心身の反応と考えられ、また、免疫機能に働くワクチンの成分や免疫増強剤に原因があるとの説もありますが、更に研究、究明が必要です。



世界保健機関（WHO）は子宮頸がんワクチンの安全宣言をしており、また、名古屋市の7万人対象者の調査で接種者と非接種者の間での、24項目の「多様な症状」の比較では差がなかったと報告され、ワクチンの再開を求める結果となりました。

いずれにしても、接種直後の血管迷走神経反射（血圧低下、失神を起こすことがあり、献血や注射で失神を起こした経験のある人は申し出て、寝た姿勢のまま注射を受け、30分ほどの十分な時間を取りたいものです。

2020年1月、WHOは「予防接種ストレス関連反応」という概念を発表しました。接種前後5分以内に起こる急性ストレス反応や10歳代で、以前の注射後の失神などのいやな経験や、血液、けがに対する恐怖心など「ストレス」、「不安」等を持っている人はかかりつけ医と本人を交えて十分に話し合い、無理をせず、自己判断をしないことが大切です。積極的な勧奨接種中止のきっかけとなったHPVワクチン接種後の「多様な症状」は、接種後数日（接種後7日以内に生じた反応）におこる「予防接種ストレス関連反応」として接種医と相談し、治療を受けましょう。

一時差し控えて接種機会を逃した人のキャッチアップ接種が、1997年4月2日～2006年4月1日生まれの女子で2022年4月～2025年3月までの3年間、定期接種として受けられます。お住いの自治体に問い合わせてください。



（キャッチアップ摂取のご案内）

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou/hpv_catch-up-vaccination.html

子宮頸がんはワクチン接種と検診でリスクを避けましょう。